



雜

録

きんらぎと其の異名

せく生

●●●●●
きんらぎは二月の和名である。古事記、書紀、
萬葉集など、ごく／＼むかしの事を語つたり、
歌つたりした古い書物にも、皆その通り、きんら
ぎと書いてある、夫故に歌よみなどは、昔から二
月とは詠まないで、この和名ばかり用ゐたのであ
る。

風さむみまだきんらぎの山の端に

かすむとみえて雪のふりつ。(衣笠内大臣)

さは姫の空に霞の衣更着や

ながき日影も此の月ぞしる。(顯昭法師)

清輔朝臣は早く其の語の意味を考へて、「二月さ

むくて、更に衣をされば、きぬさらさ」と云ふを、

あやまれるなり。」と言つた。それから誰でも、

其の外には考へる人も無かつたのが、跡部光海翁

は之と少々異なる説を立て、「二月をきんらぎと

いふは陽氣が更に來る故、氣更來にて、陽氣の發

達するをいふのだ」と言つた。この外二つ三つ之

と異なる説もあるが、何れも取るに足らないから、

今は言はない方がよいと思ふ。

夫故まづ二月は(1)未だ寒さも去り兼ねて、衣を

更に衣るといふ意と、(2)時氣更に來るといふ意と

の兩義である。併し之は時氣更に來る故に、餘寒

の結果として衣を更に衣るといふ事となるからは
 同一の事實より、此のことは出でしものと考へ
 らる。されどささらぎの語原が果してそれか、否
 か疑なきものでもなく、畢竟これといつて動かな
 い語原は實にわからないから、只古い説をあげた
 ばかりで、次にはこの月の異名として、歌はれた
 ものをしるす事とする。

ひめつさ月 (紀友則)

鶯のかよはぬさとのやどはあらじ
 花さかりなるひめつさ月

雪消月 (俊頼朝臣)

年越えて春こそみえず富士のねの
 雪ささえ月のころもふれ、ば

梅津月 (公)

大空のふとやしるらん梅津月

梅見月 (有家朝臣)

とふ人もなき故郷の梅み月

風かぜのなさを袖そでにしるかな

小草生月

緑みどりなるけに色いろあさし小草生

月つきまちえたるむさしの、原はら

服装の事 (下)

彌 生 譯

服装ふくさうの美ひは童たごに外觀がいけんの装またるに止とどまらず、猶なほまた又
 世よに立ち、事ことを成なすに當あたつて、大おほに、其そのの成せい功こうの輔すけ
 となることは疑うたがふべからざるの事實じじつなり。人ひと、試しらみ
 に、清せい楚そなる衣服いふくを着きくる時とき、其その感かん果くわして如何いかな
 るかを思おもへ。必かなずや、其その感かん化わ深ふかく内部ないぶに通つうして

心中一種の美感の生ずることを知るべし。而かも其の感覺は、手裡指頭の間に波及して、従て、日常とるところの業務の上に顯るゝことを免れざるべし。何となれば、人々、日常の行動は、其の感覺思念の結果たるや論なければなり、衣服の人に及ぼす感化の著しきは、吾人の晴衣を着けたる時と、平服の時との心地の全く一變するにても知らるべし。然れど、世人は年少、未だ家を成さず、収入亦少く青年者に向て、寸時も時流に倣れざれとは望まざるべし。彼等は、但だ、汝等の清楚なる服飾を喜ぶなり。總べて、容儀の端正、服装の清秀なるは、大に、人の注意を惹くものなり。されば、毫も服飾に意を用ひず、常に、垢じみたる見苦しき衣服を纏へる者と、日常、清楚なる服装をなし、端正なる容儀を保つの人と、孰れか信ず

べきやといはい、何人も、後者の信頼すべきを知るべし。清秀優美の面目を引くと同時に、醜陋劣悪なるもの、擯斥せらるゝは、是れ、素より、自然の數なればなり。

服飾中、最も意を用ひざるべからざるは、襯衣の類なり。垢じみたる襯衣を着し、見苦しき、カラ、カフスを着くるは、如何なる口實を以てするとも其の非を被ふこと能はざるべし。何となれば、一箇の石鹼、數片の曹達、價數錢に過ぎざれば、如何なる人も、之を購ふこと能はざる筈なく、又、人に托して、洗はしむとも、其の費知るべし、而も、其の費に堪はずといふ人あらざるべければなり。襯衣下衣などの清潔なるは最も多く、其人の容儀に關するものにして、假令、上着は、着古したるを纏ふとも、襯衣、下着にして、極めて、清

鮮ならんには、人に接して、嫌忌せらるゝこと少
 きものなり。人の世に出で、成功すると否とは
 全く服装の如何に因るとはいはず。然れど、荷も
 身を立て家を興さんとするものは、必ず、服装に
 意を用ひよといふなり。是れ、予が、數多の實例
 に徴して、其の重んずべきを確認し、切に、青年
 諸士に勸むるところなり。収入の幾部分を服飾に
 費してよきや其は、人々の境遇によりて、各差あ
 れば、元より一定すること難し。予は、但だ、其
 の身分に應じて、出來得る丈の服飾をなさんこ
 とを勸告するなり。即ち、驕奢に失せず、醜惡に
 陥らざることこれなり、凡べて、老少男女を問は
 ず、各其の容儀外貌を修むる爲めに、費したるも
 のは、決して無益の費にはあらざるなり。但だ、
 人々は能く注意して、身分不相應に流れざること

を心掛くべし、驕奢の傾向は、其人の收入如何に
 拘らず、決して、善き事には非らず、驕奢は、如
 何なる場合に於ても、浪費たるを免れざればなり。
 然れど、又、餘りに儉約に失するも好まじき事に
 ならず、要は、唯能く、心して、可成、清楚なる
 外觀を保つべきなり。本年、流行して、來年に至り
 て、襪物となるが如き極端なる時流を追ふは、青年
 者の、最も戒めざるべからざるものにて、衣服、
 靴などは、必ず、色澤形容の穩和にして、華美な
 らざるを擇ぶを善しとす。是れ、一時の流行に止
 まらずして、永遠に續くものなればなり、世の所
 謂、シャイ者と稱するもの、多くは新奇を衒ふの
 極、奇矯なる服飾を喜びて、或は、非常に長き上
 衣を纏ひ、或は、極めて太き洋袴を穿ち、或は、
 故らに靴の先を四角になし、或は又、煽ゆるが如

き緋色の襦衣を着くるものあり。是れ皆其の嗜好の野卑なるを標榜して、自らを卑くするに過ぎず、而かも、彼輩揚々として、之れを人に示し、以て、竊かに、榮となす、嗤ふべきの至りならずや、社會に信用を博し、世人の尊重を得、依て以て、身を立て、家を興さんとする前途有爲の青年諸士、豈、彼等の擧に倣ふて可ならんや

霞と霧

摩訶生

既に蒸氣として昇騰したる水は、無色透明にして空氣中に存在し、殊に多量となるに従ひ、益空氣の透明を助けて、茲に硝子製の天地を吾人の眼前に現出し、屈折の理によりて、吾人は遠方の森林山野等を異常に極めて明瞭に認むるを得るに至

る、俗に雨の前徴となせる場合即ち之なり。

されど一旦空氣中の温度の少しく低下するとあらむか、忽ち飽和點を下りて、直に多少の不透明

を來すなり、いふまでもなく水蒸氣の還元せられ

し第一歩なり。

○等しく水蒸氣の還元なり、滴化なり、されど、

花鳥の色にも音にも先だちて

時知るものは、霞なりけり、
尊長親王

三芳野の山も霞みて白雪の

ふりにし里に春は來にけり

一讀すれば、悠長の感自から起り、

狩衣すそ野の霧は晴れにけり

尾花が袖に露をのこして、
宗秀

秋霧のたつを煙とみしほどに

山の木葉も色づきにけり。
人丸

唱し來れば、清冷の趣自からその中に生ず。

他なし、前者は主として春に歌はれ、後者は概して秋に吟ぜられしが故のみ。

○等しく水蒸氣の滴化なり、還元なれど、

見渡せば春日の野邊に霞たち、

咲きにはへるは櫻ばなかも、

萬葉集

人とはい知らずとやいはひ玉津嶋、

霞む入江の春のわけほの、

爲 氏

この故に、其薄紅に薄紫に隸けるを形容して、霞

霧といひ。

海士小舟漕ぎ行く方を見せじとや

浪にたちそふ、浦の朝霧。

阿 佛 尼

霧時雨 富士を見ぬ日ぞ面白き。

芭 蕉

こゝを以て、其薄蒼く薄白く漲さるをたへて

濛々といふ。

他なし、其滴化たるや、前者は極めて微細なり、

又概して稀薄なり、之に反して後者は稍粗細なり

又概して濃厚なるによるのみ。

夕鴉かへる翅はかつきえて

霞にのこる、をちかたの山。

春 海

稀薄なるが故に、遠くかゝりて映るなり。

山路にも人やまどはひ川霧の

たちこぬさきにいざ渡りなむ。

野 恒

濃厚なるが故に、時としては近く眼前に迫り來るともあるなり。

山の端を見ざらましかば春霞

たてるも知らでへぬべかりけり。

菜の花や霞の下に少しづつ。

一 茶

之れ吾人の往々遭遇する處にして、比較的が高く舞ける霞の特性を示せるに非ずや

河霧の麓をこめてたちぬれば

空にぞ秋の山はみえける。 躬 恒

之れ亦吾人の屢目撃する光景にして、低く地の表面……殊に江湖沼澤の邊に逍遙せる霧の特性を語るもの非ずや。

○共に水蒸氣の變態なり、されど古人は歌ひたり、月影のみよするは田上川のみなかみ

稻舟のわづらふ最上川の早き瀬

をこともしらぬ 琵琶の聲

霞のひまに まぎれけり。 讀人不知

鶯の羽風をさむみ春日野の

霞のころも今朝さたつらむ

更に又告げてのこせるあり、曰く

時月黒ク、迷テ失レ道テ不能レ達スル、謙信見ニ甲斐

軍夜曇キ人馬有ワルテ聲也、潜ニ起ツテ擽シ甲ヲ傳ヘ令テ、

擧ニ八千騎ニ出テ、牙營ヲ五鼓詣ニ信立シテ牙營、天會大霧、謙信自ニ霧中ニ直ニ斫テ而入。 山 陽

翌ニ披荆棘ニ躡ミ險阻ヲ、深入數里、列レテ卒ヲ數千分シ曹吶喊、山壑爲ニ震フ、俄而雨降リ、烟霧濛密

有レ虎走出、將突レ圍。 世 弘

乃ち知る、一は閑雅にして親むべきを表し、他は壯立にして慣るべからざるを示せるを。

○霞といひ霧といふ共に不透明の浮遊体としては同一のもの、されど古來邦人の霞を吟せしもの頗

る多く、霧を咏するもの比較的に少きは何ぞや、知らず、霧果して其趣に於て霞に如かざる處ありや否や。

蓋し霞は動的の靜なるものにして、霧は動的の殊に動なるもの、既に動的の動なり、この故に一た

び過ぐれば、日月山川、亭榭樓閣、鷄鳴狗吠、松

籟箏韻、擧げて濛々の裡に埋め去る、豈唯古人の所謂五里霧中にして止まらむや、しかも更に一過すれば、たえぐに現れ来るもの、何ぞ當に瀨々の網代木のみならむや、吾人の見を以てすれば、霧は誠に寸歩をも霞に譲るものに非ず。

之を要するに、霞は深窓の佳人の如く、霧は超俗の墨客の如く、彼を水彩畫に比すれば此は薄墨の日本畫と評すべきもの、而して共に其異れる點に於て、特得の趣を存せるものなり。

幼稚園保育上の誤謬

幼稚園の保育に關する誤謬の説の有害なるもの、一は、學校の形式を幼稚園に輸入する事に在る。こは最も重大なる誤にして、やがて幼稚園の發達をも沮言するに至らん。かゝれば、幼兒が眞實の課業に従事する以前に於て、既に學校といふものを厭倦するに至るべし。兎角して理解する事を得る以前に、幼兒を心力的課業に壓しやることは、甚しき失敗の直接の原因なるをかし。若し幼稚園にして、初等學校若しくは幼稚學校の種類と化し、從來の

發達に待つべき幼兒の精神諸力をして、濼弱なる或は機械的活動によりて強制せしむるが如き事をなせば、その幼稚園こそ、やがて、精神なきものにして、囿園に同じからむ。かくて教育系統の中にも加はるを得べからざるに至らん。このいみじき誤の要求たるや、たゞに教育學、心理學のすべての法則を侵すのみに留まらず、抑々又より高尚なる幼兒の自然性、幼兒の道德性を侵言するものにこそ。

この要求こそ、實に幼兒が生れて尙理解に必要な一つの經驗をも有せざる時に當りて、既に物知りたらんが如くに見せたい望みさいふべけれ。(キンテンガルテンレグ井ユー)

サンサイ

原米女

この俗語は越中の國、ことに富山地方に、昔から随分と流行つたもので、今はちと澆れ氣味であります。尙中々に流行ります。

夏の夕、三人以上の十四歳位より歳下の女兒が集りますと、手を引きあつて輪を作り、賑やかに、面白く、謠うて環ります、歌は次から次と出で、

環りは絶えませんが、これは女子の遊戯としてはよろしい方ですが歌には感心出来ぬ如何はしいものがあります、風紀上何とか改めたいものです、今其の歌の一二を略譜を添へて御目にかかせよう。

五二
譜

6.3	5.6.6	7.5	6.6	6.0	6.6.6.5.6.7
サ	ン	サ	イ	ヨ	ン
サ	ノ	ヨ	ノ	ナ	イ
5.5	3.3.2.3.3	2.3.2.3.5.6.6	5.5.6.6	5.5.6.6	3.0
シ	メ	ベ	エ	チ	ヨ
ロ	サ	ド	メ	チ	メ
カ	メ	カ	メ	カ	メ
ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ

歌

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、おらの(己れ)あんまに(亭主又は情夫をさしていふ、)じよせん(時に又兄をさしていふ方言、)じよせん(飴のこと)買ふて貰うて、どこで嘗めよか、べら

◎サーイ、サンサイヨン、サノ、ヨ、ナイ、おら

のあんまに、せきだ買ふて貰ふて、どこではこやら、ちやらくと

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、留守どとせまいか、留守どとせまいか小豆五斗煮て團子せまいか。

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、鈍なあんに、どんすの羽織、着せて眺めりやなほどんす。

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、あの坊様よ、この坊様よ、ころも質に置いてけいせ買ふ。

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、人の見ぬまに、踊るまいか見まいか島の徳兵衛の(當地に舊時の)嫁見まいか、サーイ、サンサイヨンサノ、(索封家)嫁見まいか、サーイ、サンサイヨンサノ、

ヨ、ナイ、嫁見りや何んじや、嫁見りや何んじや、目こそへがなり、きりよーよし、サーイ、サンサ

